KOBUNSHA

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町二の一
光文社
神吉晴夫

日本代表推理小説全集3
恐怖・ユーモア編　無惨や二郎信康

昭和40年3月10日　初版発行　検印廃止　¥300

著者　南條範夫　他
発行者　神吉晴夫
印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽町2　振替東京115347　株式会社　光文社

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。〔関川製本〕
表紙の模様・意匠登録　116613
© Kobunsya 1965

日本代表推理小説全集3
恐怖・ユーモア編

無惨や二郎信康

南條範夫他

カッパ・ノベルス

日本代表推理小説全集第3巻
恐怖・ユーモア編　目次

恐怖編

無惨や二郎信康＝南條範夫　6
見知らぬ顔＝石原慎太郎　50
怪異投込寺＝山田風太郎　71
女か西瓜か＝加田伶太郎　94
案山子＝水上　勉　103
長い暗い冬＝曽野綾子　115
落ちる＝多岐川恭　129
鉢植を買う女＝松本清張　150

ユーモア編

幽霊はまだ眠れない＝結城昌治　174
半月組＝陳　舜臣　207
御先祖様万歳＝小松左京　234
推理師六段＝樹下太郎　271
流行の鞄＝星　新一　262
妾の整理＝梶山季之　288
解説　310

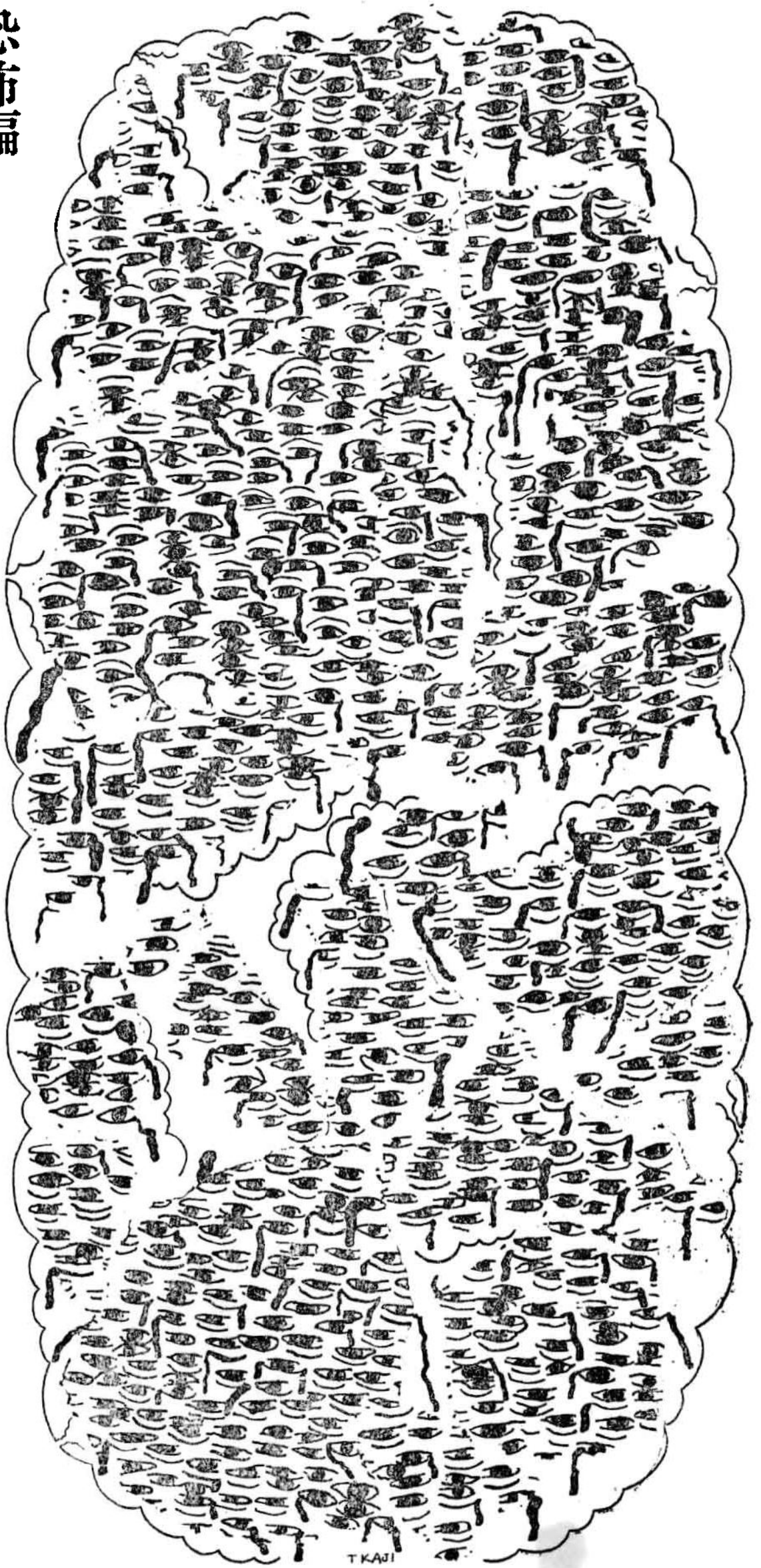
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本文扉カット

梶山俊夫

恐怖編

南條 範夫　石原 慎太郎　山田 風太郎　加田 伶太郎　水上 勉　曽野 綾子　多岐川 恭　松本 清張



南條範夫＝無惨や二郎信康

南條範夫（本名・古賀英正）明治41年、東京・銀座に生まる。東京帝大経済学部卒業。国学院大学で経済学を講ずるかたわら書いた「燈台鬼」が直木賞受賞作となる。以後、続々と小説を発表。とくに、残酷物のうまさに定評がある。代表作「からみ合い」。

1

足利氏の支流で、室町幕府に仕え、丹後・若狭の守護となった名族一色家は、道範の死後、長子式部少輔持範が丹後を領して北野一色家を唱え、その弟兵部少輔義貫は若狭を領し、二家に分かれた。

義貫が後に世保持頼らと共に幕府に叛し、信貴竜門山によって闘い、ついに亡んだことは、歴史に明記されているところであるが、持範の死後北野一色家を嗣いだ二郎信康の最期については、はなはだ明確を欠く。

「丹州諸家譜」及び「一色家実紀」によれば、彼は永享六年五月十四日、室町今出川の柳営、俗にいわゆる花の御所において、誅殺されたことになっている。

父式部少輔持範が死んだ時、二郎信康は十三歳であったので、将軍義教は、管領細川持之と図って、叔父に当たる義貫を後見役として領国の事を行なわしめたが、義貫は幼い甥のために大いに周旋し、将軍の庶腹の一女徳姫をその室として迎えることに成功した。

二郎信康は、この叔父の努力にもかかわらず、性質は

なはだ暴逆で素行修まらず、徳姫に対しても苛酷な所業がすこぶる多かった。のみならず、ついに南朝の遺臣らと結んで謀叛を企てたことになっている。

徳姫の内報によってこれを探知した義教は、義貫の哀訴をしりぞけ、断固これを誅殺することを決意した。

永享六年五月、丹後国加佐郡田辺郷の田辺城にいた信康は、幕府の命によって、上京した。

在京中の叔父義貫からの書信もあり、既に成年に達した自分が、亡父と同じく式部少輔に任ぜられ、丹後の守護職を与えられるものと信じて、意気揚々と、京は四条の叔父義貫館に着く。

義貫は久し振りの対面を喜ぶていで、ねぎらいの言葉をかけ、

——式部少輔殿（持範）亡き後、久しく後見の役を勤めて来たが、おもとも既に年頃、上様の御思召もあり、政事向きのこと、おもとの手に戻すゆえ、将軍家に対して忠勤怠りなきよう。

と、言う。

信康は、日頃、国政の実権を掌握して譲らないこの叔父に対して持っていた不満が、一挙に、陽光に直射された淡雪のごとく溶けさるのを感じ、いささか慚愧の情を感じながら、謝辞を述べた。

一夜、期待に満ちた快適な眠りを眠り、翌朝巳の刻、衣装を改めて、柳営におもむく。

花の御所は、将軍義満の築くところ、一万坪余の御所の内は、文字どおり、馥郁として、花の香りに充ち満ちている。

大門から屏重門をくぐると、遠侍と呼ばれる番所がある。大間七間、戸障子も畳もない板敷で、正面に武具が飾ってある。

衛門七という従者が、この遠侍の前に来て案内を乞うと、奏者が走り出てきて庭におり、姓名官職を問うた。

通常ならば、奏者の侍は、答えを聞くとそのまま御会所の方へ行って、取り次ぐのであるが、衛門七の挨拶を聞いた侍がすっと、遠侍の中に引っ込んだ。

柳営のしきたりをよく知らない信康主従は、別に不思議とも思わず、奏者が再び現われて、取り次いでくれるのを、待つ。

その間に、別の男が、評定所に急報した。評定所は管領の役所である。待機していた細川持之が直ちに、御所奉行本間下総守に耳打ちする。

やがて、奏者に導かれた信康が、将軍家に拝謁する

ため、御会所にやってきた。
御会所は南面した九間四面の御殿で、檜皮ぶき、襖には嵯峨野の景色が描かれているので、嵯峨之間とも言われているところだ。正面の庭には、池があり、池の向こうに猿楽の舞台が設けられてあった。
信康は一年前、徳姫降嫁決定の折り、御礼言上のため登営したことはあるが、無我夢中で何も覚えていない。始めての登営と同じような気持ちで緊張し切っていたので、そのような周囲の景観などはほとんど目にはいらない。
堅くなって、広縁にすわった。
七間四面の御主殿の方から、人影が近づいてきたので、いよいよ将軍家の御出座と、信康は、縁の板に両手をつかえてうやうやしく頭を下げる。
額越しに、何人かの人々の衣の裾と足先とを見、耳に衣擦れの音を聞いた。
だが、背後に、武具のふれ合う音がしたことには、全く気がつかなかったのである。
「一色二郎信康――」
と、何人かに呼ばれ、一たびひたと床板に着けた頭を上げようとしたせつな、がっきと両側から腕をとられ、背に捻じ上げられた。
「慮外な――何をするぞ」
驚愕の中にも、憤然として叫んだ信康の眼前、御帳を後ろに突っ立っていたのは、管領細川持之である。
銀色の眉をぴくりと動かし、沈痛な面持ちで信康を睨んで、叱咤した。
「謀叛人信康、神妙にせい」
「謀叛？　ばかなっ」
信康は、剛力をふるって左右の腕を自由にし、おどり上がって、御帳の方へ突き進もうとした。
「上様！　讒誣、誣言でござります」
と怒号しつつ、寄りかけた信康の背に、刃が叩き下ろされた。
ぐらっと片膝つきながらも、必死の声をふり上げて、御帳の奥に向かって叫ぶ。
「何とてこの信康が――謀叛などと――」
「見苦しいぞ、信康、徳姫どのより逐一、内報を受けておるわ」
信康がおどり上がった時、思わず二三歩、後ろへ逃がれた持之が、一語一語叩きつけるように言う。
「徳姫が――」

斬られた左肩を押さえながら叫んだ信康の声は、人間の声というよりも、野獣のそれに近かった。

「嘘だ、嘘だ、徳姫が――徳姫が、そのようなことを――」

と言いかけた時、電光のごとく、彼の頭の中を横切ったものがある。

「うぬ、義貫、図りおったな」

梢を逃がれる猛禽のごとく、颯と身をおどらせて、己れを斬った男の手から、血に塗られた刃を奪い、庭上に飛び下りた。

そのまま、四条の、義貫の館まで、馳せ戻る気だったに違いない。

「待てっ」

と追いすがる奴を、横薙ぎに切り払って、遠侍の方に向かって、走る。

中門の方から、何人かの番士に追われながら、血みどろの衛門七が、

「若殿、若殿、若殿はいずれに在すぞ」

と、わめきつつ、よろめいてくるのと顔を合わせた。

「衛門七、図られた！」

「おお、若殿！」

と呼び合ったのが、主従の最後の声になった。ほとんど同時に、迫いすがった侍たちによって、斬り倒されたのだ。

衛門七はそのまま絶命したが、信康はほとんど信じられぬほどの力で、よろめきながら起ち上がり、全身に血を噴き出させながら、中門に向かって二三歩、歩いた。侍の一人がその眉間に刃を突き刺すと、その刃を左手でつかんで、相手をぐわっと睨みつけ、前にのめった。

左右から、二本の刃が、両脇をえぐった。

――信康、竊ニ南廷ニ通ジ、傾覆ヲ謀ル、叔父義貫コレヲ訴フ、将軍是非ヲ問ハズ、柳営ニ召シテ誅セントス。信康、刃ヲ奮ヒ躬自ラ闘ヒ、コレニ死ス、子無シ、家亡ブ。

「一色家実紀」は、はなはだ冷静に、そう記述している。「丹州諸家譜」に記すところも、ほぼ同様である。

信康の異図を幕府に内報した者が、その室徳姫であるか、叔父の義貫であるか、あるいはその両者であるかは、各説が分かれているが、この義貫自身、後になって幕府に叛して攻め殺されたことは、冒頭に記したとおりである。

義貫の叛逆については、「国史実録」、「南方記伝」、「若

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

狭国守護次第」、「若耶群談」などにくわしいから、ここには再説しない。

私は、偶然の事から、信康の最期について、上記と全く別個の所伝があり、その間の連絡が、あまりにも常識に反するものがある点に疑問をいだいた。

2

徳川初期三代に歴仕した南禅寺の長老崇伝は、一色家の流れを汲むものとされているが、その崇伝の四代の祖、一色政照なるものは、上記持範の庶腹の子であるとも言い、また、二郎信康の子であるとも言う。持範の子ならば、信康の庶弟に当たるが、いずれにしても「一色家実紀」には記載されていない。

しかし、崇伝の従弟に当たるという一色範勝なるものが、おそらく崇伝の口利きであろうが、名家の末裔として幕府に召し出され、式部少輔に任ぜられ、御使番まで登っていることは、事実である。範勝の後、三代長七郎に至って、なぜかその家は絶えているが、たまたま私はこの一色家に伝わった「長七郎記」なるものを、東京大学図書館所蔵の「南葵文庫」の中に発見した。長七郎は政照以下の一色家当主代々の幼名だ。私が、信康の死について、疑惑の念をいだいたのは、その時からである。

同書は、長七郎家の祖政照以下の事跡を記しているが、政照の父としている信康の最期について、はなはだしく異なるところを述べている。

永享六年五月、将軍家の召に応じて、丹後の館を発したところまでは、同じであるが、その館は、前記加佐郡の田辺城のそれではなく、竹野郡網野郷の城館であったらしい。

陰暦五月の半ばに近く、かなり蒸し暑い日である。城館を出た信康は、馬を駆って、竹野川の畔、井辺村についた。

若い領主がひどく粗暴で、気が短く、いささかでもその意に反するものがあれば、即座に生命を断つ事を知っていた領民たちは、信康の姿を望見すると、蒼惶として家の中に走り込んで、身を隠した。

その隙のなかったものは、地べたに首をもぐり込ませるほど低く平伏して、危険きわまりない疾風が一刻も早く頭上を通り過ぎてくれることを待望した。

信康は、むろん、虫けらにも等しいそれらの存在は完全に無視して、従者に先立って竹野川までやってくると

馬を降りて、一息入れる。

「お肌の汗をおぬぐいなされませい」

と、追い付いた武士の差し出した布切れを、うなずいて受け取り、襟をうち広げて、手を内懐に深く差し入れた時、川沿いの森陰から、武装した騎馬の武士が、十数名現われた。

たちまち半円を作って、信康を包囲する体形をとる。

「何者か、これは一色二郎信康ぞ、人違いすな」

おどろいて突っ立ち上がった信康に向かって、馬上から、ひゅうと大気を裂いて矢が飛んだ。

矢は、信康の左の股を傷つけて、地上に突き刺さる。

「名乗れ、何者の命を受けて、この信康の命を狙うぞ」

信康が、すばやく従者の持っていた眉尖刀をひったくって構えたが、馬上の騎士たちは、一言も答えず、ひたむきに矢を浴びせてくる。

何本かはかろうじて薙ぎ落としたものの、全身に、はりねずみのごとく矢を突き立てられて、信康は地上に転倒した。

襲撃者は、五人の従者をもことごとく斃した。

馬を飛び降りた彼らが、信康以下の死体を、森の中に運び、あらかじめ掘ってあった穴の中に埋め終わるには、きわめてわずかの時間しかかからなかった。

よほど、手順よく計画されてあったものであろう。「長七郎記」によれば、彼らは更に、

——四辺ノ物陰ニ打チ伏シツツ、コノ次第ヲ見タル土民ドモヲ、一人アマサズ捕ヘテ殺シテケリ。

と言う。

一人残らずと言っても、誰かこの惨劇を見たものの中に、死をまぬがれたものがあったに違いない。さればこそ、この事実が伝わったのであろうから。

いな、土民たちは、暴逆の領主とは言え、このような非業の死を遂げた信康に対して、近代人にとっては不可解な同情の念さえいだいたらしい。後に、信康の死体が掘り返されて、竹野川口に近い願興寺に改葬された時、この森の中に、石塔を建てて信康殿首塚と記したと伝えられている。

「長七郎記」が、その祖一色政照の父か兄に当たるはずの信康のことを詳細に述べているのに不思議はないが、その記述の内容が、信康に対して、いちじるしく不利であるのは、なぜであろうか。

ほんらいならば、義貫の後裔を一色家の正統とする上記の「一色家実紀」、「丹州諸家譜」などこそ、信康につ

いて不利な言行を残すはずであるのに、両書とも、彼が幕府に叛をはかって誅せられた次第を詳述しながら、その生前の事跡については、ほとんど記すところがない。

ところが、この「長七郎記」は、信康について上記二書と全く異なる最期を叙述するのみならず、その生前について、無数のいまわしい悪逆の所業を伝えているのである。

信康が、網野郷の城館に居住している間、近くの領民どもは、全く生きた心地がなく、時たま彼が田辺城に帰っている間、ようやく安らかに息をつくことができたと言う。

ところが、田辺の城にいる間の信康については、いっさいの悪声を聞かない。むしろ、非常に穏やかに城館の中に逼塞し、あまり外に出ることもなかった様子である。

同じ人間が、単に居処を変えるだけで、そんなにも激しい変貌を示したのは、一体なにゆえであろうか。

田辺の城では、叔父義貫の監視の眼が行き届いており、その腹心の老臣が、目付役の意味で在住していたとすれば、一応の説明がつかぬこともない。

それにしても、その信康が、ほとんど同じ日に、京の花の御所と、丹後の竹野川の畔とで殺されている奇妙な事情については何の説明もないのである。

信康なる人物は果たして、一人なのか、それとも、二人いたのであるか。

私は、昨年秋、丹後に旅行した時、現地について、この疑惑を解こうと考え、井辺村に近い竹野川畔を訪れてみた。

かの騎馬の士たちがひそんでいたという森は、今や、田畑の真中に十数本の老木を残すのみで、とうてい、当時の状況をしのぶよすがもない。

土地の人の誰に聞いても、何一つ知れなかった。

わずかに、信康殿首塚について、それらしいものが、昭和二年の奥丹後一帯の大地震の頃まで残存していたらしいことを、故老の口から聞き得たのみである。

信康の死体が改葬されたという願興寺なる寺も、その地名のみ残っていたが、寺そのものは、遂に発見することができなかった。

だが、私は、まだあきらめずに、旧田辺城のあった舞鶴市や、一色家の菩提寺である岩松山如願寺のある宮津市におもむいて、信康の死についての何らかの手掛かりはないものかと、捜し回った。

宮津市役所の吏員が紹介してくれた熱心な郷土史家星野増吉氏は、私の説明を聞くと、

「それは、初耳です」

と、おどろき、大いに興味を起こして、駆けずり回ってくれた。

そして、遂に捜し当ててくれたのが、安富健一郎氏である。

安富氏は、現在宮津市で中学教師をしているが、僧門の出身である。そして、その数代前の祖が、竹野村の願興寺の住職であった。

同氏の保管する古文書の中に、私は、京の凌善尼の名で、屢々供物が願興寺に贈られているのをみつけて狂喜した。

凌善尼は、他ならぬ信康の室徳姫の剃髪後の称号である。徳姫は、信康死後、京に戻って、嵯峨野の僧庵で、生を終えている。この人が、願興寺に供物を欠かさなかったとすれば、願興寺に改葬されたのは、まさしく二郎信康でなければならない。

とすれば、花の御所で、細川持之の面前で、従士衛門七と共に無惨な死をとげた信康なる者は、果たして何者か。明確な解答は、もちろん、得られなかった。

しかし、同じ安富氏の古文書の中にあった「丹老筆談」という写本によって、私は、この奇怪きわまる事実の真相を、おぼろ気ながらつきとめ得たように思う。

これは、二巻一冊、美濃綴の天地を切って、縦八寸二分横五寸七分の古写本であり、奥書に「慶長十三戊申三月三日、安富景安」とある。原本がいつの頃、何人によって書かれたものか不明であるが、丹波、丹後一円の伝聞を記したもので、文体はきわめて素朴、さして教養のある者の筆とは思われない。

しかし、その下巻第三話に「兵部少輔どの奸謀のこと」とある一章を判読して、私は思わず、呻ったのである。

以下、竹野川畔ではりねずみとなって死んだ信康を、信康Aとし、花の御所で斬られた信康を、信康Bとして両者の関連を、私の推理するところに従って記述する。

A・B両者が、果たして同一人物であるかないかは、叙述の進むにつれてあきらかとなるであろう。

3

二郎信康は、その名の示すとおり、一色持範の次男である。

嫡男は太郎吉康といったが、十八歳の時、仏門にはいった。欣求浄土の志であったためではない、両眼の視力をうしなったからである。

応永二十九年、幕命を奉じて尾州の叛徒討伐に向かった父持範、叔父義貫に従って、小山城を攻めたが、乱軍の中に流れ矢を右眼に受けた。

味方のそれ矢か、敵の盲矢かわからぬ。命に別条はなかったが、右眼はえぐりとられ、間もなく左眼もまた、視力衰え、遂に失明した。盲目の身で武将の後嗣となることは不可能である。

痛恨煩悶数カ月、ようやくあきらめて、髪をそり、竜全と称した。翌年、持範死亡、二郎信康が、家督をついだのである。

義貫は、管領の命によって信康の後見人になると、みずから丹後加佐郡田辺城に乗り込んできて、万端の指図を行ない、腹心の老臣吉良道昌を残して、信康を監督せしめた。

持範以来の家臣が不満を持ったのは当然であろう。信康が十五歳になるのを待ち兼ねて、家臣一同から、領国の実権を返還してくれることを願ったが、義貫は、幕命を盾にとって、許さない。

――まだ、信康も若い、安心して丹後の政事をゆだねる訳にゆかぬぞ。

しいて願えば、幼主を擁して、家臣どもがかってなことをしたいためであろうと言わんばかりなので、一同ひきさがった。

信康が十八歳になったらば、いかになんでもと期待したが、いぜん、施政権返還の様子はみえない。

――義貫殿は、丹後の知行を横領して、実子義直殿に嗣がす気ではないか。

と、信康の家臣の間に不穏の気がみなぎった時、義貫が、思いがけない手を打った。

信康のために、将軍義教の女徳姫を貰い受けてくれたのだ。

この一事は、義貫の心理に対するあらゆる疑惑を一掃した。異心があるものならば、そのような事をするはずはないのだ。

――やはり、義貫の殿は、信康殿のことを心底、心配しておられたのだ。

家臣たちは皆、そう感じたし、信康自身も、叔父のはからいに感謝した。

徳姫が、丹後に下ったのは、永享五年初秋である。

この時まで、二郎信康は、確かに、ただ一人である。だが、この時を境に、すでに述べたごとく、信康Aと信康Bとが出現しているのだ。

そして、信康がAとBとに分裂するにつれ、当然、その新妻である徳姫も、いわば徳姫Aと、徳姫Bとに分裂せざるを得なくなっている。

まず「長七郎記」によって、信康A及び徳姫Aについて語ろう。便宜上、両者のAは省略する。

丹後に下った徳姫は、一色家代々の城のあった田辺にではなく、遠く北端の網野郷の城館に迎えられたが、政治軍事に全くうとい彼女は、格別それを不思議とも思わなかったらしい。

信康がほとんど田辺にはおらず、この支城を愛して、ここに居住しているというのであるから、自分も当然そこに住むべきものと考えていたのだ。

それにしても、都になれた徳姫の眼は、その四囲の風物のあまりに荒涼として、うるおいがなく、館も予期したよりはるかにみすぼらしいのにおどろかされた。

都から連れて下ったのは、小萩と呼ばれる侍女ひとり、十七になったばかりの世間を全く知らぬ姫が、全身的によりかかってゆくものは、若い良人二郎信康以外にはな

この頃の婚姻の風習に従って、姫が良人の信康の顔をはじめてまともに見たのは、新床の上においてである。

それもただ、上眼づかいにちらっと眼に入れただけ、

——凛々しい殿御。

と羞恥と歓喜との雲の中で、茫と感じた。

もしこの時、姫が信康を少しく冷静に観察する余裕をもっていたならば、彼のその夜の態度が、少しく異様であることに気がついたに違いない。

信康は、美しい薄物一枚に、しなやかなからだをくるんで、消え入りそうに横たわっている姫を、およそ新床にのぞむ良人としてはふさわしくない瞳で眺めていた。

欲望よりも、当惑が、喜悦よりも苦渋が、その深く巨きい双眸にあふれている。

幾たびか、姫のからだに手をかけようとして、躊躇しているのだ。

やんごとない将軍の姫を迎え得たため、さすがの若武者も心臆していたのだと言えぬこともないが、それにしても、そのおそれつつしむごとき狐疑の貌は、その後の彼の行状と比べてみれば、あまりにも違いすぎた。

遂に、意を決して、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com